



所 功著  
**菅原道真の実像**  
臨川書店 2002年

今なお多くの日本人は、受験の前に“天神さん”(天満宮)へ詣って合格を祈願したり、お守り(守護札)を頂いて頼みとする。私にも、かつてそんな経験があるので、昨年夏のオープン・キャンパス特別ツアーの際も、本学を目指す高校生たちを京都御所へ案内した後、北野天満宮で昇殿参拝をさせて頂いた。今春、その御利益(ごりやく)はあったのだろうか。

さて、この天神さんが“学問の神さま”と仰がれる菅原道真だということは、誰もがご存じであろう。しかし、どんな人物だったのかということは、意外なほどよく判らない。なぜなら、道真は歿後まもなく“御霊(ごりょう)”として畏れられ「天満大自在天神」と称する絶大な威力をもつ神さまとして祀られる前後から、史実を越えた様々な伝説に包まれてしまい、そのような伝説が一般には史実のごとく信じ込まれているからである。

そこで私は、文学部の卒業論文に菅原道真の伝記研究を選ぼうとした。けれども、その前年に指導教官の弥永貞三先生が「菅原道真の前半生」という名論文を書かれたと聞き、さらに間もなく、その恩師の坂本太郎博士が人物叢書『菅原道真』を出版されるに及び、これじゃ正面から挑んでも無理だと考え、やむなく同時期に文人官吏として活躍した三善清行(みよしのきよゆき)というマイナーな人物の伝記研究に取り組んだ。それが数年後(昭和四十五年)、坂本博士の推薦により、人物叢書『三善清行』となったのだから、人生、何が幸せに繋がるか判らないものだと思う。

しかし、道真の実像を明らかにしたい、という夢は諦めきれず、人物叢書を執筆する前後から、関連の論文や評論を何篇か書いてきた。しかも平成14年(二〇〇二)春には、道真が延喜三(九三)年二月二十五日に数え五十九歳で薨じてより千百年目を迎えるため、その前年来、京都・東京の国立博物館などにおいて道真・天神さん関係の特別展覧会などが催された機会に、いろいろな執筆を頼まれた。そこで、それらの旧稿と新稿を組み合わせ一冊に纏めたのが、上掲の拙著(臨川選書)にほかならない。

その内容は三部構成とした。まず前篇の基礎知識には、一般むけの解説評論(菅原道真、波瀾の生涯 菅原道真と三善清行 菅原道真と天神信仰)、また後篇の研究論考には、やや専門的な考証論文(“寛

平の治”の再検討 菅原道真、配流の真相 菅原道真の神儒仏信仰)を収め、さらに付篇の参考資料として、一般読者にも専門家にも多少役立つもの(『菅家伝』記事年表 菅原氏の略系図 菅原道真の研究案内 全国の主な天満宮一覧)を加えたのである。

このうち、私にとって感慨深いのは、最も早く三十数年前に書いた と の論旨が、当時ほとんど注目されなかったのに、近頃ようやく大方に評価されつつあり、特に『菅原道真と平安朝漢文学』(東大出版会)の著者藤原克巳氏などが、拙論を発展させて豊かな道真像を描かれていることである。それに勇気づけられて、最近新たに「阿衡紛議と菅原道真」(和漢比較文学会編『菅原道真論集』勉誠出版)を書き、また一般むけに「“正論”を貫いた菅原道真」(産経『正論』3月号)などで、道真の真面目(めんもく)を説くことに努めている。

その結論を簡単にいえば、道真は極めて優れた碩学・漢詩文家であったが、決して単なる学者・文人ではなく、大変な政策通であり大胆な行動家だったとみられる。換言すれば、真に誠実な広い見識と固い信念と強い勇気を持主であった、と称して過言でないと思う。だからこそ、宇多天皇から格別に信頼されて異例の栄進をとげたが、逆に立場を異にする権門勢家の人々から不当に非難されて追放の悲劇に陥らざるをえなかったのである。

ところで、今回の本書は、このような平安前期史上に活躍した人間道真の“実像”を解明することに主な目的があり、歿後の天神信仰には簡単にしか触れていない。しかし昨年来、その研究史を調べてみると、思想史のテーマとして仲々面白い。

たとえば、本書にも少し紹介したが、「和魂漢才」という熟語は、道真の学徳を表わす彼自身の言葉として、幕末ころから全国に広まった。しかし、すでに大正年代、加藤仁平氏が明らかにされたごとき、この熟語を、室町時代成立の『菅家遺誠』を解説する文中に記したのは谷川士清であり、しかも道真の言葉として使ったのは平田篤胤であるから、江戸中期以前には遡(さかのぼ)りえない。

とはいえ、つとに紫式部が『源氏物語』の中で「オ(ごえ)を本としてこそ大和魂の世に用ゐらるゝ方も強うはべらめ」という意味に即して考えれば、外来の儒教・漢詩文に精通し、その“漢才”を活用しながら宮廷社会の現実に柔軟に対応する識見“大和魂”を発輝した人物こそ、実は道真なのである。従って、道真を「和魂漢才」の人と称えることは、十分意味があるといえよう。



(ところ いさお 法学部教員)



八杉満利子、林晋著  
**お話し・数学基礎論**  
講談社 2002年

まず最初に、これは数学の入門書ではありません。数学の基礎というものを、日常のことばで読んで楽しんでいただく、という目的で書かれた本です。数学基礎論物語りの口マンで、疲れた頭をリフレッシュしていただければ嬉しいです。「数学って難しいなあ」と思う方が多いでしょうね。数学といえば証明。その証明が頭痛の種になって、数学を敬遠しがちですよ。そう、数学というのは証明によって真理を保証するものなのです。でもその証明ってほんとにそんなに確実なんでしょうか？証明とは明らかに正しいいくつかの事実から、人間の論理思考によって結論を導くものです。その前提や思考過程がまちがいでない、と誰が保証してくれるのでしょうか？そういうことを真剣に考えた数学者たちがいました。それは19世紀の後半に集合という概念が起こったところからの物語りです。

集合は今ではよく使うことばです。私の講義科目に「集合と論理」というのがあります。その集合です。集合とは、「物の集まり」です。そんなものはいくらでも作れますね。「京都産業大学」は産大の学生さんと教職員の皆さんをメンバーとしてもつ集合です。私たちは集合に入っている「物」なのです！集合がなぜ数学に必要なのかって？数学は実はすべて集合の世界で記述できるものなのです。

でも、あまり簡単に作れるのでいい気になってどんどん集合を作っていくうちに妙な現象が起こりました。ある物がある集合に入っていて入っていない、という現象です。「入っていて、しかも入っていない」こういう現象を矛盾といいます。数学では絶対に避けなければならないことです。矛盾が起こっては真理保証ができないのですから。さあどうしましょう？

数学者は困ったときにこそ勇気が湧いて、問題を解決しようとします。その問題解決をめざした学問が数学基礎論と呼ばれました。それは論理によって数学をきちんと書き直して、矛盾の源を探し当てて、それを退治しよう、という計画でした。数学基礎論の研究者たちは、危機感と夢と希望をもって、20世紀の前半を生きました。

この本では、まず集合の世界で遊びます。かんたんな集合の例や集合の工作や無限に物がつまっている無限集合などに会います。そうして、ある物が「入っていて、入っていない」妙な集合にたどりつきます。

困りましたね。

その問題解決の道具としての論理の話が続きます。「論理なんて数学より難しいや」ですって？でも皆さんは毎日論理を使って生活しているのです。例をみれば、「こんなふうにして論理を使っていたのか。自分も論理の天才なんだ」と納得するでしょう。

集合と論理が大体わかったところで、数学基礎論が何を目標としたか、が語られます。それは、論理を使って現実の数学をきちんと書いた、数学のコピーを作ることから始まります。そのコピーでは「入っていてしかも入っていない」という矛盾は起こらない、ということを示す、誰でも納得するようなかんたんな方法で示そうというのが最終目的でした。その方法について、数学基礎論学者たちとの間の論争が展開します。それはとても人間的な論争なのです。最後にある思いがけない結論が出されるのですが、それは読んでのお楽しみ。内緒でヒントを書くと、「すべてを計算できるユニバーサル・マシンはありえない」とか、曲の終わりが始まりになるようなパツハの曲とか、そんなことに関係があることなのです。

それでそうして最後に、古い時代の数学基礎論のエッセンスが、21世紀にも生きているのだというメッセージがあります。

それで、数学基礎論の目的は実現したの？という声が聞こえそう。実は、「誰でも納得するようなかんたんな方法」で、数学に矛盾が生じない、ということを示すのは無理だ、という結論だったのです。それでは数学は矛盾するかも？無理をしなければ、矛盾はしません。「入っていて入っていない」などという集合は作らないように、論理できちんとコントロールできるようになったからです。

日常のことばで書かれているから、これを読んでもほんとの数学ではないのでは、という心配は無用です。これでもりっぱな集合論であり、論理学なのです。ただし、こんなふうののんびり書いていると、時間がかかって大変だから、数学をするときには記号や式をたくさん使うのです。この本は記号も式もなしに、くつろいで読んでいただきたいのです。くつろいでほしいから、集合や論理の話も、コーヒーの香りを楽しみながらのおしゃべりで、進んでいきます。登場人物たちは、京都観光にも出かけます。皆さんも一緒に京都観光をしてください。学生時代に京都を楽しんでください。



(やすぎ まりこ 理学部教員)